

《調査報告》

短期大学における教員養成の意義と課題に関する研究 —本学卒業生へのインタビューを中心に—

A study on the significance and problem of teacher training in College —Focusing on interviews to this school graduates—

村瀬 桃子¹⁾・松田 澄子²⁾・沼山 博³⁾・渡邊 浩美⁴⁾
Toko Murase, Sumiko Matsuda, Hiroshi Numayama and Hiromi Watanabe

¹⁾米沢女子短期大学国語国文学科、²⁾米沢女子短期大学日本史学科、
³⁾米沢栄養大学、⁴⁾寒河江市立高松小学校

要旨

我が国の短期大学における教員養成の位置づけを明らかにするという目的から、本稿では、その端緒として本学の創立間もない頃の卒業生4名に対するインタビュー調査を行った。その結果、以下の点が明らかになった。①1期生は、高校卒業後すぐに短大に進学した者は少数派で、教員免許がなく既に教職に就いていた者（いわゆる代用教員）が多数派であったという特殊事情があった。②1～2期生のほとんどが教職課程を履修していた。③3期生あたりまでは、山形県の教員は面接で採用されていた。④1期生は特殊事情もあり地元（山形県内）での就職が多かったが、それ以降の特徴として、東北地方や関東への就職とともに、北海道への就職が目立った。⑤短大卒ということで、管理職（主任以上）になれないということは表立ってはなかった。⑥出産・育児・介護等のサポートが不十分な場合は、教職を続けることが非常に困難であった。

キーワード：短期大学 教員養成 卒業生 インタビュー

1. はじめに

2年前、本研究を始めた当初の研究目的として、我々は次のような思いを抱いていた。すなわち、「近年教員養成において実践性が強く問われてきているが、それは教育界へいかに人材を輩出できているかという問題と裏腹のものである。現在政府レベルで検討が進んでいる教職課程改革において、短期大学における教員養成の位置づけが不明確になっているようであるが、短期大学教職課程修了者の進路調査等を行って、その実態を把握するとともに、課程の存在意義や課題を明らかにし、議論に一石を投げよう」と。

2年前の研究開始から現在までの間にも、教員養成改革は動き続けているが、短期大学に関しては、やはり不明確なままのように思われる。

このような状況の中で、本研究では、実際に教職に就いた短期大学卒業者の実態を明らかにしようと考えた。そこで、2013（平成25）～2014（平成26）年度にかけて、米沢女子短期大学が創立された時期の教職課程履修者の動向を知ろうと、卒業生へのインタビューを行った。

手がかりが皆無であったため、米沢女子短期大学で助手を勤めた神原敏子さんに、当時のことをうかがった。結果、現在までに、神原さんを含め4名の方にインタビューを行うことができた。

神原 敏子さん（家政1期生、元米沢女子短期大学家政学科家政専攻助手）

佐藤 秀子さん（家政1期生、元米沢市立中学校教員）
高橋 節子さん（国文1期生〔米沢女子短期大学5期生〕、元米沢市立北部小学校校長）
佐々木泰子さん（国文5期生〔米沢女子短期大学9期生〕、元北海道小学校教員）

本稿は、この4名の方のインタビューの概要をまとめ、明らかになった点を報告するものである。

なお、本稿は「短期大学における教員養成の意義と課題に関する研究―本学卒業生の進路調査を中心として―」（2013〔平成25〕年度「生活文化研究所共同研究」および2014〔平成26〕年度「理事長裁量費」）の成果の一部である。

2. インタビューの概要

インタビューでは、おおよそ以下の点についてうかがった。

①経歴について

米沢女子短期大学への入学、卒業の年
免許の種類（小・中・高、教科、普通〔一級・二級／専修・一種・二種〕・臨時・特別）
大学への編入等をした場合は、その入学、卒業の年
採用された年月と、退職した年月
教員を勤めた年数
初任地
実際担当した教科
管理職（主任、教頭、校長）になった方には、昇任した年

②自身のことに関して

なぜ教員を目指したのか
定年前に辞めた方には、なぜ定年前に辞めたのか
管理職になった方には、なぜ管理職になったのか
短大卒・女性ということでの差別等はなかったか
家族のサポート（親・夫・姑…）
子どもたち・家事・育児

③在学・在職当時のことについて

④当時の就職状況

どのくらい教職課程をとっていたか
どのくらい教職希望がいたか
実際に教職に就いたのは
同窓生で教職経験者を知っているか

⑤その他

以下、インタビューの日時順に、その概要を記すことにする。

2. 1 神原敏子さん（家政1期生、元米沢女子短期大学家政学科家政専攻助手）

インタビュー日時： 2013（平成25）年11月9日 14：00～17：00

インタビュー場所： 神原さん自宅（聞き手：松田澄子・村瀬桃子）

①経歴

1952（昭和27）年4月 短大入学 1954（昭和29）年3月 短大卒業

免許の種類：中学校（教科：家庭）普通二級、小・高の仮免許（→後に通信教育で中学校普通一級、高等学校普通一級に）

1965～66（昭和40～41）年 日本女子大学 卒業（通信） 1954（昭和29）年4月 採用（米沢女子短期大学 助手） 1991（平成3）年3月 退職（米沢女子短期大学助手）

初任地：山形県米沢市

1954（昭和29）年4月～2か月間 米沢市立南部小学校（籍は短大に置いたまま、市からの依頼で。）

教員を勤めた年数：38年（米沢女子短期大学）

②ご自身のことに関して

なぜ教員を目指したのか（米沢市立南部小学校）

- ・米沢女子短期大学の助手に決まっていたが、当時、米沢市立だったということ、小学校の仮免許があるということで、2か月間だけ、南部小学校で教えていた。

なぜ米沢女子短期大学を定年前にやめたのか

- ・母親の入院のため（しかし、短大をやめる予定の前に逝去）。ひきとめられたが、やめてしまった。

短大卒・女性ということでの差別等はなかったか

- ・米沢女子短期大学の助手は、みな卒業生であった。しかし、昇進などでは、苦労があった。

家族のサポート（親・夫・姑…）

- ・夫は教育者で、「自分が勉強しなければ、教えることはできない」と、通信教育を受けること等にも理解してくれた。

子どもたち・家事・育児

- ・実の母親が、育児を手伝ってくれた。

③在学・在職当時のこと及び④当時の就職状況

- ・1～5、6期生あたりは、山形県内の他、北海道、福島、宮城、岩手、青森、神奈川（横浜）、東京等で就職した。
- ・小・高の仮免許も取れたので、夏期講習を受け、普通免許を取った人もいないのか。
- ・米沢女子短期大学の助手に対しては、通信教育を受けさせてくれた（4大卒の学歴になった）。

どのくらい教職課程をとっていたか

- ・当時は、すでに中学や青年学校の裁縫の先生だった人が、教員資格を取るために来ていた。1～2期生はほとんどが取っていた。
- ・教員養成が少なく、女学校出で教員になった。短大で免許が取れるということで、要望があった。
- ・地元で免許が取れるということで入った人も。

- ・高卒ですぐ短大への進学する者は少数派だった（104人中、10人程度）。
- ・短大2年終わって家政大学へ編入もあったのではないかな。

どのくらい教職希望がいたかな

- ・すでに教職に就いていた（免許を取りに来た）人は、殆どではないかな。

実際に教職に就いたのは

- ・すでに教職に就いていた人は、資格を取って職場復帰したのではないかな。
- ・当時は、教員採用試験はなく、面接であった。親や親せきの後継者という感じで教員になった人もいた。

同窓生で教職経験者を知っているかな

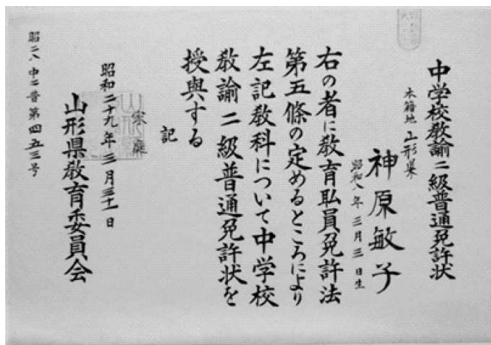
- ・中学校に勤めた方：佐藤秀子さん（米沢市上郷在住、家政科1期生）
- ・高橋節子さん（米沢市上郷在住・国文1期生、北部小学校校長で退職）
- ・庄内の人もたくさんいる。
- ・川西で、小学校の教頭をした人もいる。

⑤その他

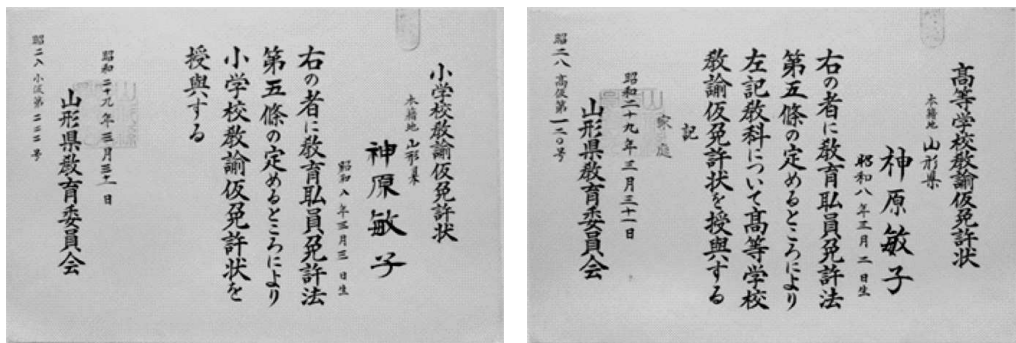
- ・3期生から、寮ができた（普通の家に10数人くらい、5つほど。）
- ・教職以外でも活躍（保育関係など…新庄で保育園長経験者）。
- ・神原さんの卒業から2年後くらいから、教員採用試験が始まった（その前は、県の面接を受けた）。
- ・米沢女子短期大学で、日本女子大の通信の試験をしていた（前後期、会場になっていた）。短大卒でない人も受けていた。受ける人がいなくなって、閉鎖（1970〔昭和45〕年くらいまでであったのではないかな）。

以上が、神原敏子さんへのインタビューである。このインタビューがきっかけで、教職経験のある佐藤秀子さんと高橋節子さんへのインタビューをすることができた。

神原敏子さんの教員免許状



中学校教諭2級免許状（家庭、1954〔昭和29〕年）



左：小学校教諭仮免許状（1954〔昭和29〕年）右：高等学校教諭仮免許状（家庭、1954〔昭和29〕年）

2. 2 佐藤秀子さん（家政1期生、元米沢市立中学校教員）

インタビュー日時： 2013年11月30日 14:00～17:00

インタビュー場所： 神原さん自宅（神原敏子さん同席）（聞き手：松田澄子・村瀬桃子）

①経歴

1952（昭和27）年4月 短大入学 1954（昭和29）年3月 短大卒業

免許の種類：中学校普通二級（教科：家庭）、小学校（仮資格）・高等学校（仮資格）、1969（昭和44）年一級（認定講習で仮資格→二級へ）

1954（昭和29）年4月 採用 1992（平成4）年3月 退職

本採用：1954（昭和29）年 採用（中学校）

当時は就職難、山形大学で面接試験、筆記試験はなし。教育学部卒でも採用は難しかった（→辞めなければ空きがない…親から受け継ぐ職という認識、教科によって差も）。

教員を勤めた年数：38年

初任地：山形県 南置賜郡 窪田村立（1955〔昭和30〕年～米沢市）窪田中学校（5年間、1954～59〔昭和29～34〕年）…学テ・勤評の時代。

その後の勤務校

- ・米沢市立西部小学校（1年間、1959～60〔昭和34～35〕年）…4年生受け持ち。困ったのは音楽。
- ・米沢市立第一中学校（7年間、1960～67〔昭和35～42〕年）
- ・米沢市立第三中学校（5年間、1960～72〔昭和42～47〕年）
- ・米沢市立南原中学校（4年間、1972～76〔昭和47～51〕年）
- ・米沢市立第四中学校（10年間、1976～86〔昭和51～61〕年）
- ・米沢市立第二中学校（5年間、1986～1992〔昭和61～平成4〕年）…生徒指導主事に。58歳で退職。

管理職になった年：米沢市立第二中学校（5年間、1986～1992〔昭和61～平成4〕年）在職中に生徒指導主事に。（生徒指導部長などになっている人が多い。教頭・校長は、4～5期くらいからいるのではないか。）

②ご自身について

なぜ教員を目指したのか

- ・両親が教師で、はじめはなりたくなかった。父親が早く亡くなり、母から「教育は身から離れない」、地元だから…と。しかし、教育実習で、子どもに接してなりたいたと思った。

なぜ定年前にやめたのか

- ・夫の病気のため（58歳で退職）。

短大卒・女性ということでの差別等はなかったか

- ・男性は上昇志向だが、女性は…。
- ・管理職については、4大出だからというわけではない（能力で）。

家族のサポート（親・夫・姑…）

- ・夫は中学（国語）の教員。
- ・介護もしながら、義姉に手伝ってもらった。

子どもたち・家事・育児

- ・子どもは1人。習字教室の母娘がいて、そこのおばあちゃんにあずかってもらった（小学校まで）。子どもが中学に上がってからは、修学旅行等の時は泊めてもらった。

③在学・在職当時のこと及び④当時の就職状況

- ・教員の少なかった神奈川、北海道、福島。（1期生は県外が少なく、地元採用。）
- ・教員—3期生あたりまでは親の跡継ぎという感じであった。

どのくらい教職課程をとっていたか

- ・ほとんどが教職をとっていた。入学時から取る気の人ばかりだった。
- ・同級生は、年上の人が多かった。地元で免許を取りたくて受験していた。定員オーバーになるくらい多かった（30代後半、子連れで実家が米沢…のような人も来ていた。小学校の先生をやめてきた人、洋・和裁の学校から来た人も）。県内からたくさん来ていた。

どのくらい教職希望がいたか

- ・年上の同級生は、免許がなく助手のような位置づけ（いわゆる代用教員）だったのではないかと。保障はないものの免許を持って再就職するため各地（当時は面接のみ）へ行ったのではないかと。

同窓生で教職経験者を知っているか

- ・米沢から北海道へ、再び米沢に戻ってきた人（校長経験者）がいるという。

⑤その他

- ・就職先は田舎、分校、小規模校。都市で就職は難しい。
- ・1959～60（昭和34～5）年は、ベビーブームで子どもが多かった時期。
- ・短大の2年間、びっちり授業があった。教員がそろわず、常勤の先生がいない（東京から月1回程で集中講義）ので、いるときに必死で聞いていた。高卒生は年上にひっぱられていた感じであった。キャリアアップという意識があった。
- ・日本女子大に免許を取りにいった（夏のみスクーリング、最大40日間）。
- ・104名中、教育実習生はみな米沢2中で期間は4週間だった。家庭科以外の教科も実習した（数学や男子の職業科、体育も）。研究授業も他教科でやった。

2. 3 高橋節子さん（国文1期生〔米沢女子短期大学5期生〕、元米沢市立北部小学校校長）

インタビュー日時： 2013（平成25）年12月14日 13：30～16：30

インタビュー場所： 米沢女子短期大学 松田研究室（聞き手：松田澄子・村瀬桃子）

①経歴

1956（昭和31）年4月 短大入学 1958（昭和33）年3月 短大卒業

免許の種類：中学校普通二級（教科：国語・家庭） 小学校免許状→上郷小の時、校長から出張扱いで試験を受けるようにいわれる（小学校の免許取得のため）。小学校免許試験…仙台・大阪・福岡（3～4か所、土日2日ずつ、試験のみ）。1次…教科と一般教養（2日間、宮教大、北海道・東北地方から2～300人）、2次（1クラス分くらいしか合格者がいなかった）…実技（絵・体操〔前転・後転〕・音楽・図工、指導案を書く）、3次…面接、4次…教育実習（前の年の合格者は宮城会場で4～5人。0人の県も。1974〔昭和49〕年小学校二級、平成2年小学校一種）。

1958（昭和33）年4月 採用 1998（平成10）年3月 退職

本採用：1958（昭和33）年 採用

山形県教員本採用。短大で本採用は自分以外誰もいなかった。採用が少なかった。

同級生が何人か受けたが、1人のみ合格、何年も4月本採用はいなかった。講師・臨時を何年かやって採用というのはあった。

教員を勤めた年数：40年

初任地：山形県 米沢市立南原中学校 綱木分校（1年、1958～59〔昭和33～34〕年）…1～2年腹式の担任。新採は分校だったが、嫌とは思わなかった。小・中で行事も一緒だった。

その後の勤務校等

- ・米沢市立南部小学校（6年、1959～65〔昭和34～40〕年）…教員の中で最年少だった（講師はいた）。
- ・米沢市立上郷小学校（13年、1965～78〔昭和40～53〕年）…着任時、教員の中で最年少だった。新採なし。
- ・米沢市立東部小学校（10年、1978～88〔昭和53～63〕年）…教務主任（1984～5年頃）
- ・東南置賜教育事務所（3年、1988～91〔昭和63～平成3〕年）…指導主事
- ・米沢市立愛宕小学校（4年、1991～94〔平成3～6〕年）…教頭
- ・米沢市立北部小学校（4年、1994～98〔平成6～10〕年）…校長

管理職になった年：

教務主任 1984～5（昭和59～60）年頃（米沢市立東部小学校）

指導主事 1988（昭和63）年（教育事務所）

教頭 1991（平成3）年（米沢市立愛宕小学校）

校長 1994（平成6）年（米沢市立北部小学校）

②ご自身について

なぜ教員を目指したのか

- ・小5くらいには作文に書いていた。子どもが好き。
- ・母（主婦）から「女は自立しなくては」と言われた。
- ・実際に実習に行って、自分がお金を出してでも先生をやりたいと思った。

なぜ管理職になったのか

- ・米沢市立東部小学校（当時児童数1200人、1学年6～7クラス＋特別支援＝40学級程、年配の人が多かった）…教務主任は7～8年目（1984～5年、研究主任）、校長から言われた。女性の管理職というのは、男女雇用機会均等法という時代の流れもあったのではないか。
- ・教育事務所では指導主事（＝教頭くらい。移動すると教頭。）
- ・教育事務所…山形の他の地区の先生とのかかわりが広がった。
- ・指導主事（中学校男性3名、小学校女性1名〔一人は女性がいたら良いということで、高橋さんの後任も女性〕…指導課・社会教育課・総務課〔県職女性1人〕計20人くらい）…全ての学校へ行行って指導。国語・家庭・幼児教育（米沢の幼稚園の研修に参加、指導）も担当した。当時、生活科が始まった。
- ・担任を持つのが一番。

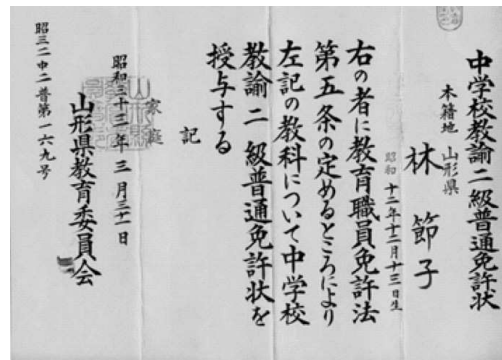
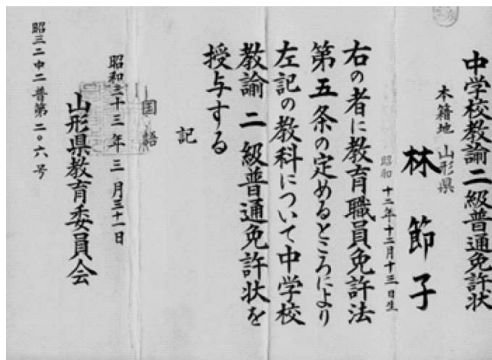
短大卒・女性ということでの差別等はなかったか

- ・短大卒ということで、ひけめを感じたことはない。
- ・短大卒だから、2年長く勤めることができた。短大卒でも、女性が定年まで途中でやめなくて勤め上げたい（健康な限りは…教育事務所の時に思った）。

子どもたち・家事・育児

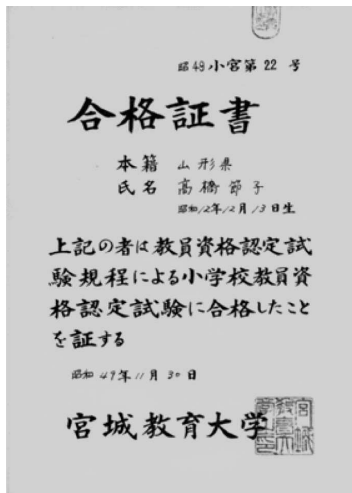
- ・子どもたち（男の子2人）は、近所の人に預けていた。
- ・休んだのは産休の時のみ（6週間）
- ・預け代とミルク代ですべて給料が吹っ飛んだ。でも、教えることが好きだから苦にならなかった。

高橋節子さんの教員免許状等



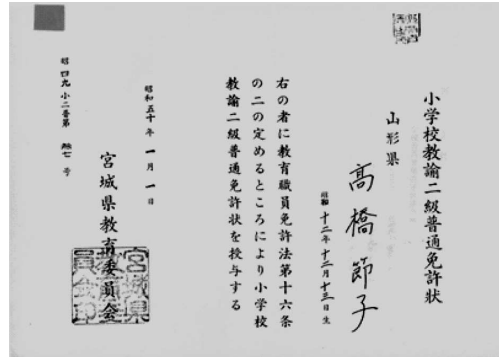
米短卒業時（1958〔昭和33〕年3月）の中学校教諭2級普通免許状（左：国語、右：家庭）

村瀬：短期大学における教員養成の意義と課題に関する研究—本学卒業生へのインタビューを中心に—



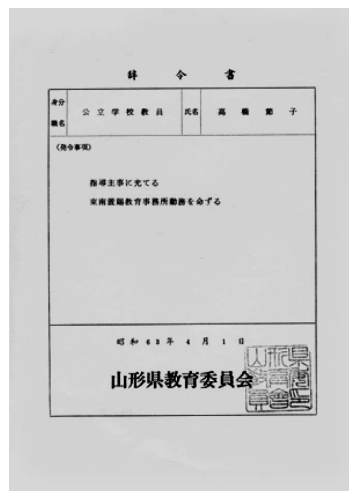
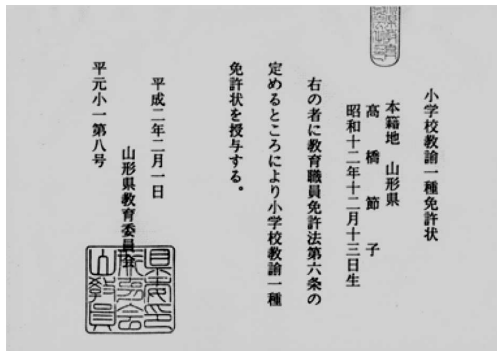
左：教員資格認定試験合格証書（1974〔昭和49〕年）

右：小学校教諭2級普通免許状（1975〔昭和50〕年）



左：小学校教諭1種免許状（1990〔平成2〕年）

右：指導主事辞令（1988〔昭和63〕年）



米沢女子短期大学の同窓生で、北海道で教員になった者が比較的多いということがインタビューや同窓会誌から判明していた。しかし、高橋節子さんのインタビュー後、具体的な方が現れなかった。約1年後にやっとたどり着いたのが、次の佐々木泰子さんである。北海道での教員生活を中心に、お話をうかがった。

2. 4 佐々木泰子さん（国文5期生〔米沢女子短期大学9期生〕、元北海道公立小学校教員）

インタビュー日時： 2014年11月13日 13:30～16:30

インタビュー場所：佐々木さん自宅（夫の明さん同席）（聞き手：松田澄子・布施賢治・村瀬桃子）

①経歴

1960（昭和35）年4月 短大入学 1962（昭和37）年3月 短大卒業

免許の種類：中学校普通二級（教科：国語・家庭）

実際担当した教科：小学校

1962（昭和37）年8月末 採用（卒業後から本採用までの間、洋品店でアルバイトをしていた） 1969（昭和44）年3月 退職

教員を勤めた年数：6年6ヶ月

初任地：北海道 羽幌町立羽幌小学校

その後の勤務校

増毛町立増毛小学校（北海道の西海岸は、庄内に似ている。山形出身の人が多い。）

②ご自身のことに関して

なぜ教員を目指したのか

○北海道に行くことに、不安はなかったか？

- ・不安はなかった。やる気で行った。自分から進んで行った（兄がついてきた）。小学校5～6年生から、北海道で先生になりたかった。古いしきたりに縛られるのがいやだったからかもしれない（例えば、昭和30年代までの米沢は自由に結婚もできなかった。だから自由な北海道へ）。
- ・米沢女子短期大学の就職担当からの呼びかけがあった。

○洋裁ブームの時代に、なぜ国文学科へ？

- ・裁縫が好きではなかった。本を読むのが好き（しかし、子どもができてから、編み物・洋裁を習うようになった）。

なぜ定年前にやめたのか

- ・1965（昭和40）年に結婚、その後出産。退職（29歳）したのは、育休がなかったから（本当は、辞めたくなかった。ずっとやっていたら…くやしい。）
- ・退職後は、PTA、婦人部長、社会教育、町村内の行事など、地域で活躍した。

③在学・在職当時のこと及び④当時の就職状況

- ・北海道で就職した人の中には、残った人もかなりいる。教職かどうかはわからない。
- ・管理職になった人も（結婚のチャンス逃している）。
- ・北海道で山形師範出の校長などもいた。

どのくらい教職希望がいたか

○職業意識は？

- ・教員になりたくて入学してきた。自分を磨こうという気持ち。家庭に入るより就職（結婚するまでは…）。卒業の時は、結婚を考えていなかった。
- ・就職で、各地に散らばっているのではないか。
- ・米沢女子短期大学は公立で人気があった。

同窓生で教職経験者を知っているか

- ・日本海側の留萌に多い。田舎の学校が多い（都会ではない）。

⑤その他

○当時の北海道の様子について

- ・当時は、町村教委に人事権。高卒（筆記・面接）で通学しつつ免許取得。
- ・中学校家庭の人を小学校教諭に採用。

- ・昭和30年代は、服を貸したことがあるほど貧困だった。
- ・所得倍増・高卒増で、北海道も短大が増えていく（地元で進学）。1970（昭和45）年頃から、（米沢女子短期大学から）北海道へ行く人も（米沢女子短期大学へ）来る人も激減（教員充足）した。

3. おわりに

以上、米沢女子短期大学の初期の卒業生である4名の方のインタビューで、明らかになったことをまとめると、以下のようになろう。

①1期生は、高校卒業後すぐに短大に進学した者は少数派で、教員免許がなく既に教職に就いていた者（いわゆる代用教員）が多数派であったという特殊事情があったという点である。それゆえ、②1～2期生のほとんどが教職課程を履修していた。また、③3期生あたりまでは、山形県の教員採用は、試験でなく面接で採用されていたという点である。この点は、山形県の教員採用の方法と照らし合わせて裏付けをする必要がある。さらに就職先については、④1期生は特殊事情もあり地元（山形県内）での就職が多かったが、それ以降の特徴として、東北地方や関東への就職とともに、北海道への就職が目立ったという点である。昇進の点でいえば、米沢女子短期大学の初期の卒業生で、小・中学校の教員になった者は、⑤短大卒ということで、管理職（主任以上）になれないということは表立ってはなかった、ということである。しかし、キャリアアップの機会以前に⑥出産・育児のサポートが不十分な場合は、教職を続けることが非常に困難であったという点である。今回、インタビューを行った4名の方が教職に就いた時期は、育休や保育所の整備の問題、後年には介護等の制度の不備があり、家族や知人による私的なサポートがなければ、教職を続けることが困難であった。実際、若い時に退職された佐々木さんは育児が、退職間際に退職された佐藤さんは介護がその理由であった。昇進という点からみると、実際には短大卒という学歴よりも育児や介護等に関わる差（特に女性に不利に働く）の方が大きかったと推測できる。言い換えれば、これらをサポートできれば、定年まで勤められ、昇進の可能性も高くなるのではないか。

本稿の元となる「短期大学における教員養成の意義と課題に関する研究—本学卒業生の進路調査を中心として—」では、これらインタビューを参考にしつつ、量的調査も行っており、現在、分析の準備中である。アンケート用紙を本学の同窓会である「さわらび会」の協力を得、同会『会報』に同封することで、大規模かつ効率的に調査することができた。これらの調査結果については、他日に期したい。

なお、個人情報に関しては、ご本人の了承を得ている。

（文責：村瀬桃子）

¹ 2013〔平成25〕年度「生活文化研究所共同研究」の「共同研究応募申込書」より。